

松本市子ども日本語教育センターの新年度は5月がスタートです。

4月の「日本語を母語としない児童生徒支援事業」説明会を皮切りに、各学校では支援対象の子どもたち全員について打合せの会議を開き、子どもたちの日本語学習の進め方等について先生方と丁寧に確認し合いました。そしていよいよ支援がスタート！今年度も、たくさん子どもたち、そして多くの学校の先生方との出会いが楽しみです。

「どんな子どもたちが日本語支援を受けているの？」

今年度の日本語教育支援 現況



今年度（H30.5.20 現在）は、小学校 14 校から 24 名、中学校 5 校から 9 名、計 37 名の支援依頼がありました。8 年前のセンター設立以来、初めて支援に入る学校も含まれます。

子どもたちの由来国は、中国やフィリピンをはじめ、ベネズエラ、カナダなど 8 か国にも渡っています。中には海外で生まれたが日本国籍を持っているという子どもたちも少なくありません。

昨年度のスタート時も今年度並みの人数でしたが、年度末には依頼数が 51 名に上りました。“ある日突然、日本語がわからない子どもが転入してくる”という状況がいかに多いか、この数字からも推し量れるでしょう。

また、年度途中での支援依頼の中には「日本で生まれ育っているが、どうも日本語がよくわかっていないようだ」と、学校や保護者が気づいて相談されるというケースも近年多く見られます。低学年のうち、周りの友達を見て何となくクラス活動についていけないのが、学年が上がるにつれ困難さが顕著になってくるといふ子どもたちです。先生や友達とは“おしゃべり”によるコミュニケーションは取れるのでついつい見過ごされてしまう子どもたちにも、ようやく日本語支援の手が届き始めています。

“外国由来中学生のための進学相談会” 開催のお知らせ

中学卒業後の進路選択に際し、外国由来の児童生徒および保護者の皆さんに高校入試の基礎情報を提供する“外国由来中学生のための進学相談会”を6月30日（土）に開催します。

中3生は、7月の三者懇談会に具体的に臨めるように、そして中1、2生は、3年生になって慌てず進路を考えられるよう、今回は中学生を対象を絞った相談会です。具体的には、日本の学校制度と卒業後の進路の紹介、31年度の高校入試スケジュールとそれに向けたさまざまな準備、今後予想される教育費等についてお話しします。また、来日後一定期間内の生徒に適用される県立高校入試の特別配慮・措置についても紹介します。通訳もつきますので、多くの参加をお待ちしています。

記

日時： 6月30日（土）午前10時～

会場： なんなんひろば 会議室4

参加申し込み法： 6月6日（水）に、松本市教育委員会学校指導課より各学校に通知が配信されます。担任の先生を通じて申し込んでください。外国にルーツがある生徒であれば誰でも参加できます。

申し込み締め切り： 6月22日（金）

お問い合わせ： 松本市子ども日本語教育センター 電話：25-7143

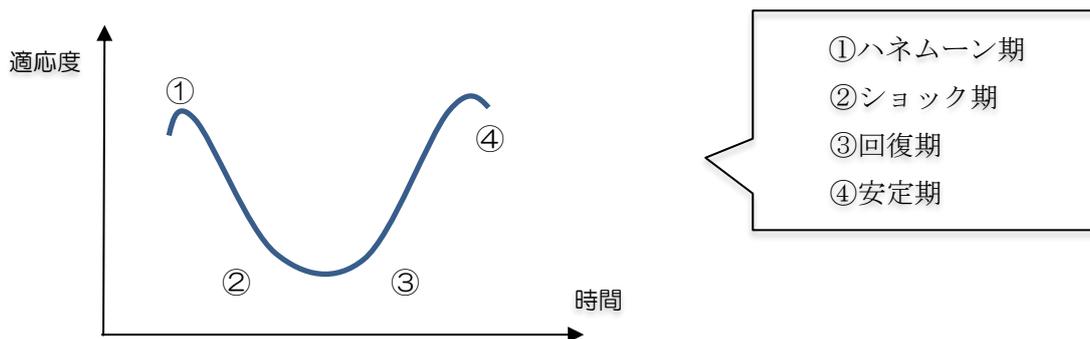
子どもたちの異文化適応プロセス

～子どもたちが来日後に見せる様々な姿から～

センターがスタートして以来、来日してゼロから日本語を学ぶたくさん子どもたちと出会ってきました。

子どもだから言葉がわからなくても友達になれる、言葉もすぐに覚える、と私たち大人は思いがちです。もちろんそうとも言えますが、子どもにとっても、それまで住んでいた環境ががらっと変わることはストレスに違いありません。仲の良い友だちや先生と離れ、言葉もわからず、食べ物も生活習慣も違う世界にいきなり放り込まれるのです。

皆さんはこんなU字曲線を見たことがありますか？



これは異文化適応の過程を表す“カルチャーショックのUカーブ”です。来日してまもなくは、新しい環境が珍しく気持ちも高揚しています(①)。だんだん慣れてくると言葉や文化など様々な違いにぶつかり、「楽しい」だけではなくなくなってきます(②)。この時期子どもたちの姿は様々です。休みがちになる子、体調不良を訴える子、先生のそばにいて離れない子、黙っている子、すぐに口答えしたりけんかっ早くなる子。それを乗り越えると今置かれている環境を受け入れ始めます(③)。そして、慣れてきて自分の居場所ができ、落ち着いてくる安定期になります(④)。一般的にこのような過程をたどると言われています。

小学校4年で来日したAさんは、最初こそ緊張していましたがスムーズに支援がスタートし、素直に学習に取り組んでいました。しかし少し経つと「頭が痛い」と言うことが増えてきて、学校を休みがちに。順調に進んでいた日本語学習も宿題をやってこなかったり、覚えたと思ったことがまたできなくなったり…。そんなAさんでしたが、仲の良い友達ができからは徐々にそういうこともなくなり、日本語支援を終了する頃には「集団でいるとすっかり日本の子に溶け込んでいて、すぐに見つけれない」と先生に言われるまでに馴染みました。

また、小学校3年生のB君は日本語支援がスタートしたものの、初めからやりたくないことは頑としてやらない、注意されると「うるさい」「おやすみ!」、やってはいけないことをわざとやる、教えた日本語はなかなか口に出でこない、動き回る、注意されるとかみつく…。そんな姿を1年以上見せました。これがいつまで続くのか…と悩んでいましたが、ある日「最近とても落ち着いているんです」と担当支援員。宿題もしっかり取り組み、落ち着いて授業を受けるようになったといいます。ずっと見守ってきた学校の先生が「彼の中で、日本語を学ぶ必然性が理解できたんじゃないかな。自分が今日本にいるということを受け入れられたんだと思います」と話されていました。

外国からある日突然学校に来る子どもたち。受け入れる私たちも、彼らの言動に混乱したり振り回されることは決して少なくありません。しかしそれは、新しい環境を受け入れ自分の居場所を作るために必死な姿なのかもしれません。「子どもに寄り添う」という今や言い古されている感のある言葉の意味を、今一度噛みしめたいと思います。